

平成27年度病虫害発生予報 第1号（4月予報）

平成27年3月25日
青森県病虫害防除所

【概要】

水 稲：フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病はやや少ない、細菌性の苗立枯病はやや多い、ばか苗病はやや少ないと予想される。

りんご：モニリア病は津軽地域でやや少なく、県南地域で少ない、腐らん病は平年並と予想される。リンゴコカクモンハマキ及びミダレカクモンハマキは平年並、キンモンホソガは津軽地域でやや多く、県南地域でやや少ない、リンゴハダニは少ないと予想される。

野 菜：にんにくの春腐病はやや多いと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (フザリウム・ピシウム属菌)	県内全域	—	やや少ない	①育苗期の気温は平年より高いと予想される(—)。
苗立枯病 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	県内全域	—	やや多い	①育苗期の気温は平年より高いと予想される(+)
ばか苗病	県内全域	—	やや少ない	①前年の本田における発生量は平年並であった(±)。 ②種子更新及び種子消毒が徹底されている(—)。

(2) りんご

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (葉腐れ)	津軽地域	やや早い	やや少ない	①りんごの発芽は平年よりやや早い見込みである。 ②津軽地域では、消雪が平年より遅れる見込みであり、園地が湿潤となりキノコの発生に好適な条件となるおそれがある(+)。県南地域では既に消雪している(—)。 ③前年の実腐れの発生量は平年より少なかった(—)。 ④向こう1か月の降水量は津軽地域で平年並か多く(±)、県南地域ではほぼ平年並と予想される(±)。
	県南地域	やや早い	少ない	
腐らん病 (枝腐らん)	県内全域	—	平年並	①3月中旬の発生量は平年並である(±)。
リンゴコカクモンハマキ	県内全域	やや早い (越冬巣からの脱出)	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬幼虫量は平年並である(±)。

病虫害名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
ミダレカクモンハマキ	県内全域	やや早い (越冬卵のふ化)	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬卵量は平年並である(±)。
キンモンホソガ	津軽地域	やや早い	やや多い	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②りんごの発芽は平年よりやや早い見込みである。 ③前年秋の発生量は津軽地域では平年よりやや多く(+)、県南地域では平年よりやや少なかった(-)。 ④累積降雪量は平年並であった(±)。
	県南地域	やや早い	やや少ない	
リンゴハダニ	県内全域	やや早い (越冬卵のふ化)	少ない	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬卵量は平年より少ない(-)。

(3) 野菜

病虫害名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(にんにく) 春腐病	県内全域	—	やや多い	①越冬前の生育量は津軽地域・県南地域ともに平年並であった(±)。 ②向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(+).

注：気象情報は3月19日発表の1か月予報による。

発生量に対し、(+):多くなる要因、(-):少くなる要因、(±):多少に大きく影響しない要因。

2 防除のポイント

(1) 水稲

《 3～4月の防除作業 》

3 月	4 月					
6 半 旬	1 半 旬	2 半 旬	3 半 旬	4 半 旬	5 半 旬	6 半 旬
塩水選 /	浸 種	/ 催 芽・は	種 /	出 芽・緑 化 /	硬 化	

◎種子消毒

◎ *ザリウム・ピシム*属菌による苗立枯病防除

△ *リゾープス*属菌
細菌性苗立枯病菌による苗立枯病防除

△ *イネドロオイムシ*
*イネミズゾウムシ*防除 (床土混和・は種時処理)

△ いもち病 (は種前・は種時処理)

△ いもち病 (緑化期処理)

イネドロオイムシ

イネミズゾウムシ

注：◎印は必ず防除する。

△印は前年の発生状況及び品種に応じて防除する。

防除薬剤は農作物病虫害防除指針等を参照するか、指導機関に問い合わせる。

【 浸 種 】

- ① 水の量は、種もみの2倍かそれ以上の容量とする。
- ② 消毒後の浸種は流水を避け、水の交換は始めの2日間に行わない。その後は3日に1回程度、静かに水の入れ換えを行う。
- ③ 浸種中の水温が低いと消毒の効果が低下するおそれがあるので、10℃以下にならないようにする。

【 催 芽 】

- ① 芽や根を伸ばし過ぎると、は種時の芽や根の折れを招き、雑菌に感染しやすくなるので、催芽は鳩胸程度とする。

【 フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病の防除 】

- ① 土壌のpHを5.0前後に矯正する。
- ② タチガレエースM粉剤をは種前に土壌混和するか、同液剤をは種時にかん注する。
- ③ 発病のごく初期にタチガレエースM液剤をかん注する。なお、タチガレエース剤は粉剤と液剤それぞれ1回しか使用できない。
- ④ 育苗中の温度管理を徹底し、乾燥・過湿を繰り返さないようにする。

【 リゾープス属菌による苗立枯病の防除 】

- ① 傷もみの混入が多いと多発しやすいので、傷もみが多い場合は、種子として使用しない。
- ② 厚播きすると発生が多くなるので、基準は種量を守る。
- ③ ダコニール粉剤をは種前に土壌混和するか、ダコニール1000をは種時～緑化期にかん注する。
- ④ 高温、過湿で多発するので管理に注意する。

【 もみ枯細菌病・苗立枯細菌病菌による苗立枯病の防除 】

- ① 細菌病に効果のある種子消毒剤で消毒する。
- ② カスミン粒剤をは種前に土壌混和するか、は種後覆土前に種もみの上から均一に散粒する。
- ③ 育苗中の温度管理を徹底する。特に高温、過かん水にならないように注意する。

【 ばか苗病の防除 】

- ① 温湯消毒や生物農薬は、化学合成農薬に比べて防除効果が不安定である。できるだけ効果を安定させるため、処理方法や消毒後の管理方法を厳守する。
- ② 育苗中に発病苗（徒長苗）を見つけ次第抜き取る。

【 は種時または緑化期におけるいもち病（葉いもち）の防除 】

- ① いもち病抵抗性「中」以下の品種を作付する場合、箱施用剤や水和剤による予防防除を行う。
- ② QoI剤耐性菌が西日本で確認されていたが、東北地方でも確認された。近年、箱施用剤での使用が増加傾向にあるため、青森県でも耐性菌の発生が懸念されている。以下の対策を徹底し、耐性菌の発生を未然に防ぐ必要がある。

[耐性菌対策]

ア 自家採種は耐性菌発達の原因となるので、必ず種子更新を行い、塩水選や種子消毒の徹底、ほ場衛生管理など、いもち病防除の基本を確実に実施する。

イ 同一系統成分薬剤を連続使用すると耐性菌が発達しやすくなる。以下の薬剤はそれぞれ年1回の使用に止める。

・QoI剤：嵐剤、オリブライト剤、イモチミン剤、**イモチエース剤、オリザトップ剤、アミスター剤は同一薬剤とみなす。**

・MIBI-D剤：デラウス剤、アチーブ剤は同一薬剤とみなす。

・キタジンP剤、フジワン剤は同一薬剤とみなす。

ウ これらの成分を含む箱施用剤は、1年もしくは2年ごとに作用機構の異なる箱施用剤とのローテーションで使用するか、他の系統の薬剤を使用する。

エ これらの成分を含む本田散布剤は、葉いもちに使用する場合は初発前あるいは発生初期に、穂いもちの場合は薬剤の使用適期に散布する。ただし、いずれも多発時の使用を避ける。

オ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種ほではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。また、採種ほの周辺ほ場では使用を控える。

カ 使用方法に記載された使用量を厳守する。

[参考情報] QoI 剤及び MBI-D 剤耐性菌対策ガイドライン（日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会）

<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>

【 は種前～緑化期におけるイネドロオウムシ、イネミズゾウムシの防除 】

- ① 例年発生が多いほ場や、本田での防除が労力的に難しい場合には、箱施用剤により防除を行う。

☆ポジティブリスト制度に関わる注意点

育苗後、苗床跡に他作物を栽培する場合の箱施用剤は、以下のいずれかで処理する。

- ① は種時～育苗期間に処理する場合は、箱施用した農薬が置床にこぼれ落ちないように、またかん水とともに置床に浸透しないように、プール育苗にするか置床にビニルなどの無孔シートを敷く。
- ② 移植時に処理する場合は、ハウス外で行うか、ハウス内で行う場合はビニルなどの無孔シートの上で行い、置床に農薬がこぼれ落ちないようにする。

(2) りんご

【 モニリア病 】

- ① 消雪を早め、園地の排水に努め、地表面の乾燥を図る。
- ② 「展葉1週間後頃」は葉腐れの防除上最も重要な時期なので、ベフラン液剤25を適期に散布する。
- ③ 葉腐れは見つけ次第摘み取り、処分する。

【 腐らん病 】

- ① 「展葉1週間後頃」にベフラン液剤25を散布する。
- ② 薬剤だけに頼ることなく、常時園内を見回り早期発見、早期治療を行う。また、整枝剪定や施肥による樹勢の適正化、被害枝の処理など総合管理につとめる。
- ③ 剪定した切口にはその日のうちにバッチレート塗る。
- ④ 発芽前の粗皮削りは必ず行う。
- ⑤ 胴腐らんは見つけ次第泥巻きを行うか、削り取って塗布剤（フランカットスプレー、バッチレート、トップジンMオイルペースト）を塗る。

【 ハマキムシ類 】

- ① ハマキムシ類の越冬幼虫を対象に、「展葉1週間後頃」にダーズバンDFを散布する。
- ① ミダレカクモンハマキの発生が多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」にロムダンフロアブル3,000倍、カスケード乳剤4,000倍、アタブロンSC4,000倍、BT剤3,000倍（ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDF）のいずれかを選択し、同一薬剤を連続して使用する。

【 キンモンホソガ 】

- ① 発生が多い場合は、「展葉1週間後頃」にデミリン水和剤4,000倍またはノーモルト乳剤4,000倍を使用する。

【 リンゴハダニ 】

- ① 「展葉1週間後頃」にマシン油乳剤を散布する。

【 クワコナカイガラムシ 】

- ① 粗皮削りをしながら越冬卵をすりつぶす。

(3) 野菜

○ にんにく

【 春腐病 】

- ① 越冬前の生育が旺盛で、積雪期間が100日を超えると、越冬中に凍雪害を受けて腐敗株が発生しやすい。
- ② 消雪が遅いほ場や排水の悪いほ場では、滞水しないよう排水に努める。
- ③ 消雪後の腐敗株は、伝染源となることがあるので抜き取る。
- ④ 抜き取り後、降雨が予想される場合には天候を見ながら予防散布を実施する。
- ⑤ 新たな腐敗株を認めた場合は、早急に抜き取り、7日おきくらいに薬剤散布を実施する。
- ⑥ 有機物の過剰投入や窒素過多等で生育が旺盛なほ場では多発する傾向があるので、予防散布に努める。

☆住宅地や畜舎などへの農薬の飛散防止に注意してください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設、街路樹、住宅地とこれに近接する土地、森林、家庭菜園、市民農園等においては、住民や子ども等へ健康被害が生じないように、できるだけ農薬を使用しない管理を心がけましょう。また、農薬を散布せざるを得ない場合は、飛散防止に努めて下さい。農薬を使用する際は、事前に周辺住民に対して農薬の使用に関する情報や連絡先を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合は、十分配慮しましょう。

クロルピクリン剤等の土壌くん蒸剤を使用する場合はラベルに表示された“使用上の注意事項”を遵守し、当該農薬の揮散防止のため、ポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上、難透過性、厚めのもの）で被覆するなどの必要な措置を講じて下さい。また、周辺の住宅地や畜舎、農作物等に影響を与えないように風向きに十分注意しましょう。

★農薬を使用する際には必ず最新の農薬登録情報を確認してください★

農林水産省「農薬情報」 http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/
(独)農林水産消費安全技術センター「農薬登録情報提供システム」
http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

短期暴露評価の導入により使用方法が変更された農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用してください。

《当情報に関する問い合わせ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6

※当情報は、青森県農業情報サービスネットワーク「アップル農場：病害虫防除情報」(<http://www.applenet.jp>)に掲載しています。